

Title	ジェンダー化された身体と親密性における暴力—身体に刻印された男性性
Author(s)	尾崎, 俊也
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77578
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名（尾崎 俊也）

論文題名

ジェンダー化された身体と親密性における暴力
——身体に刻印された男性性

論文内容の要旨

本研究は、「ジェンダー化された身体」の位相から男性が行使する親密性における暴力を考察するものである。

本研究で言うジェンダー化された身体は、男女に不均衡に配分された身体の在り方を指している。具体的な肉体の強さではなく、行為の初期設定である身体の用い方を指している。男性であれば活発で大胆に動作することが、幼少期からのスポーツや遊びを通じて許容され、男性個人においては日常的な動作や用いる言語を含めて積極的に大きく行為することが身体的に学習され刷り込まれている。このことで男性身体は社会的に構成され、なおかつそのことが自然視されてきた。本研究で親密性における暴力は、ドメスティックバイオレンスやデートDV、セクシャルハラスメントなどを指す。親密性というのは、夫婦やカップル関係などに限らない。ここで言う親密性は、相互の結び結びによって発生するものではなく、男性個人の主観的世界において構成される親密性を指している。なぜなら、男性の自己主観的な世界観でつくりあげられた一方向的な親密性が、暴力の背景にあると考えられるからである。この意味で、ジェンダー化された身体の内容に、そのような身体化された鷹揚で自己都合の良い態度も含んでいる。

このような問題意識のもとで、これまでの行為論の考え方を第二章で検討した。社会理論の歴史、とくに行為に関する理論を振り返ると、個人と意識の関係でさまざまな理論化が行われてきた。近年、やや身体に関する言及が見られるものの、意識的な側面から行為の動機や意味が推し量られてきた。意識から行為を捉えてきた行為論を再検討し、これまでの行為論が男性の理論家のもとでジェンダー化された身体の視点が抜け落ちてきたことを明らかにした。そのことで、ジェンダー化された身体の視点から親密性における暴力を考察する意義を明らかにした。

第三章は、男性学において強い影響力を持つメッサーシュミットのヘゲモニックな男性性概念と暴力理論について検討を行った。メッサーシュミットは少年非行や犯罪を中心に、加害者は暴力行為を通じて男性性を実践していることを明らかにし、日本の男性学はその考え方を導入してきた。重要な先行研究であるメッサーシュミットの理論から親密性における暴力がどのように読み取れ、またジェンダー化された身体の視点からはどのような知見が見出せるのかを論述した。それと同時に、男性学に共通するヘゲモニックな男性性を中心とした理論の立て方について批判的検討を行った。

第四章は、ミクロな次元に着眼点を移した。脱暴力の分野で先進的取り組みをしているカナダの事例を取り上げた。まず、実際にどのような取り組みが行われているのか、取り組みの全体像を概説した。その上で実践の意義を論じ、また社会学的な観点や本研究が重視するジェンダー化された身体の視点からは、どのような問題があるのか明らかにした。カナダの加害者プログラムは、日本の研究者や臨床心理士によって紹介され、同様のプログラムを導入するにあたって、参照すべき先行事例として扱われている。したがって、カナダの加害者プログラムの実践形態や理念を検討することで、併せて今後日本で取るべき加害者対応の在り方についても議論した。

最終である第五章では、行為論の問題（第二章）、男性学における暴力論の問題（第三章）、心理的側面を重視する加害者対応の問題（第四章）を踏まえて、ブルデューの理論を引き合いにジェンダー化された身体と男性支配の例として今日見られる男性の暴力の事例を議論した。その上で、ジェンダー化された身体という概念が理論的にどのような展望があるのか検討した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (尾 崎 俊 也)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	牟田 和恵
	副 査	准教授	辻 大介
	副 査	教 授	NORTH Scott

論文審査の結果の要旨

本論文は、DV(ドメスティック・バイオレンス)や性暴力など、ジェンダー平等が進行しているはずの現代においてもなお深刻な問題である、男性が行使する親密性における暴力を「ジェンダー化された身体」という視点から考察するものである。本論で言うジェンダー化された身体とは、解剖学的な性差に起因するものや物理的な身体の強度を指すのではなく、行為の媒体となる、男女に不均衡に配分された身体の在り方を指している。社会学においては「行為」「社会的行為」をどうとらえるかはマックス・ウェーバー以来の重要課題であるが、それは行為主体が有意味的に行うものであることが常識とされ、したがって暴力行為のように突発的に見える行為でも、性支配の貫徹のため、損なわれた男性性の回復のため、といった解釈説明がDVや性暴力についても行われてきた。本研究は、そこに、ジェンダー化された身体という概念を設定し、男性であれば幼いころから活発で大胆に動作することがスポーツや遊びを通じて許容され個人において日常的な動作や用いる言語を含めて積極的に大きく行為することが身体的に学習され刷り込まれることを通じて、男性身体が社会的に構成され、行為の「初期設定」となっていることを論じている。

本研究で対象としている暴力は、夫婦・カップルの間だけでなく、見知らぬ他者への性暴力も含むがそれは男性個人の主観的世界において親密性が構成されているからである。なぜなら、男性のまったく自己主観的な世界観でつくりあげられた一方向的な親密性も含めて、女性との親密性がこの種の暴力の背景であり、そこにジェンダー化された身体が作用する基盤があると考えられるからである。

こうした観点から、本研究では、日本の男性学にも強い影響力を持つ、暴力研究の第一人者であるメッサーシュミットのヘゲモニックな男性性概念と暴力理論について再考し、「ヘゲモニックな男性性」を中心とした暴力や性支配についての理論の立て方について批判的検討を行った。

さらに本研究の特色は、DV防止の取り組みの先進国であるカナダのトロントでの加害者対象のプログラムについて現地でフィールドワークを行い、ミクロな次元にも着眼しているところにもある。DV対策一般に進展が遅く、加害者対応については民間で第一歩がやっと踏み出されている段階の日本でも、カナダの方式は日本の研究者や臨床心理家によって紹介され、参照すべき先行事例として扱われているが、しかしそこに心理学主義的な偏りがあること、「ジェンダー化された身体」の視点からすると見逃されていることを検討し、今後日本で取るべき加害者対応の在り方についても重要な示唆を与えている。

このように、本論文は、DVや性暴力という日本社会が取り組むべき喫緊の課題について、行為論という社会学の重要概念を深化させながら社会学的観点から考察を行い、かつ、問題への具体的な対応についても臨床的データを生かしながら提言を行っており、優れた論考となっている。

以上から、本論文は、博士(人間科学)の学位授与にふさわしいものと判定する。